

研究部会

授 業 改 善 部 会

I テーマ 道徳科の目標や授業づくりのポイント

本部会は前年度、村山教育事務所より指導主事を招き、特別活動についての研修を行った。授業改善を進めていくには、まずは話し合う力を子どもたちに身につけさせる必要があるという考えからである。同様の流れから、今年度は考え、議論する道徳の授業づくりについて学びを深めていきたいと考えた。

II 活動の内容

1 第1回研究部会

- (1) 日 時 令和7年7月31日(木) 9:00～10:50
- (2) 場 所 河北町立谷地中部小学校 5年1組教室
- (3) 内 容

講話・演習

『『考え、議論する道徳』の授業づくり』

講師 寒河江市教育委員会 学校教育課

指導推進室長補佐(兼)指導主事 古澤 純子 氏

① ミニ講話「考え、議論する道徳」とは

【参加者の感想より】

- ・文科省が出している参考映像などを紹介していただき、良い学びになりました。指導案事例のサイトや、日々の指導や授業研の参考になるサイト等を教えていただけるのは大変ありがたいです。

② 自己を見つめ、多様な考えを話し合うために

○活用しやすいツールなどの例示

心情円 ワークシート ICTの積極活用

○谷地南部小学校 4学年

「このままにしていたらー規則の尊重」ダイジェスト動画の視聴

- ・担任の自己開示により、本音で話し合う子どもたちの姿
- ・発言を保障される学級風土の醸成

【参加者の感想より】

- ・道徳的諸価値を理解させるために、私自身が自己開示していかなければと感じました。私自身の経験や失敗なども話して、子どもたちと本音で対話していける授業、クラスの雰囲気づくりをしていきたいと思えます。

- ・授業の様子を動画で見せていただいたことで、教師の声かけ、板書の仕方、子どもとのかかわり方など大変参考になりました。

③ 2学期に行う道徳の授業づくり

- 2学期以降に実施する授業づくり
 - ・参加者を担当学年ごとにグルーピングし行う。
 - ・事前に選んだ教材を持ち寄り、話し合いを進める。

【参加者の感想より】

- ・演習では、他校の先生と一緒に道徳の授業を作っていくということで、一人では考えつかなかった流れや視点に気づくことができました。一人で考えるよりも多くの先生と考える方が教材文についてもより深く理解し、多面的に捉えられると感じました。



④ 道徳の授業の「終末」について

- 「終末」部分についての考え方
- 終末時の読み聞かせで活用できる本の紹介

【参加者の感想より】

- ・授業のまとめは…ということで「絵本を読む」という1つの方法を教えていただき、ぜひこれから活用させていただきたいと思いました。
- ・道徳のまとめについて、折り合いをつけたり、1つにまとめたりしなくても良いということで、本当に多面的、多様な考えに触れることが大切なのだという事を感じました。

Ⅲ 成果と課題

- 道徳科の授業そのものの基本的な部分を再確認する機会となった。授業実践動画の視聴を行ったことで、授業づくりや声かけなどのポイントのイメージを共有することができ、大変有効だった。
- 道徳の授業づくりはこれまで後回しにしてしまいがちだったという声があった。今回グループ演習を行い、他校の先生方と活発な話し合いができたことで、授業づくりについて前向きになれたという感想が多かったことは大きな成果であった。
- ▲特別活動や道徳科の研修を重ねてきたが、目に見える学力向上につなげていくには時間がかかる。町の課題から見ると、国語や算数など主要教科の授業改善に直接つながるような内容の検討も必要である。

(谷地南部小学校 樋口 智一)

児童生徒理解部会

I テーマ「安全・安心な学びの場の構築 ～生徒指導実践上の4つの視点を生かして～」

近年、児童生徒を取り巻く環境は多様化・複雑化し、安心・安全な学びの場の構築が一層重要になっている。そこで、生徒指導提要で示される4つの視点を授業や学校生活に生かすことで、児童理解を深め、問題行動の未然防止や健全な成長につなげることをねらい、本テーマを設定した。

II 活動の内容

令和7年7月31日（木）9：00～10：50 谷地中部小学校

講話・演習 講師：村山教育事務所 指導課 指導主事 森岡裕香子 氏
指導主事 佐藤 章子 氏

1 **講話**

(1) 県内のいじめ・不登校等の現状

- ・いじめの認知件数は、前年度に比べ、小・中学校ともに減少となったが、依然として高い数値で推移している。この結果は、「いじめの定義」が学校に浸透し、小さいいじめも見逃さないように、積極的な認知を学校組織として進めた成果である。
- ・不登校児童生徒数は増加傾向にあり、生徒指導上の喫緊の課題となっている。要因は多岐にわたっているが、近年は特に、学業不振による不登校が低年齢化し、小学校で増加傾向が見られる。



(2) 『生徒指導提要』が示すこれからの生徒指導

- ・「生徒指導提要」は、生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書
“学習指導要領は買うけれど、生徒指導提要は買わない”…危機感
- ・「させる」生徒指導から「支える」生徒指導への観の転換
- ・プロアクティブな生徒指導の展開
“特定の児童生徒に焦点化した「事後」指導・援助”から
“全校体制で取り組む「日常的」支援に基づく生徒指導の展開”へ
- ・学校を魅力ある場所にするには・・・
あらゆる教育活動で「居場所と絆をつくる」
学習指導と生徒指導の一体化
授業に内在化した生徒指導

2 演習 生徒指導の実践上の視点を生かした授業づくり

小中学校の先生方の混合グループをつくり、ワークショップを行った。はじめに、いくつかの授業づくりの手立てや工夫を提示し、それが「生徒指導の実践上の4つの視点」のどれに該当するかを考えてみた。

その後、自身の日頃の実践を振り返り、児童生徒が様々な考えや意見を出し合い、対話的に学ぶための働きかけとして授業ではどのような手立てをとっているかを付箋紙に書き出し、「生徒指導の実践上の4つの視点」に分けながら、気づいたこと・感じたこと・これから意識したいことなどを話し合った。日頃とっている手立てがある視点に偏っていること、同じ手立てでも先生によって違う視点で行っていることなど、様々な気づきがあり、自分にはない見方や価値観を広げている場面が見られた。



3 振り返り（参加者の声）

○これまでの自分のかかわりを生徒指導の4つの視点をもとに振り返ることができ、自分のかかわりが「自己決定」に集中していたことを感じ、それと同時に課題も見つけることができました。2学期に生かしていきたいと思います。

○生徒指導について知っていたつもりになっていたことが多かったなど今日の研修を通して実感しました。普段の授業で生徒指導の4つの視点を意識しながら実践していくことが、いじめ防止につながっていくことを研修から理解することができ、有意義な時間になりました。

○現状について知るだけでなく、「生徒指導提要」が日々の生徒指導のヒントになると改めて感じることができました。未然防止のための「全ての生徒に対する指導」を、演習を通して考えることができました。



Ⅲ 成果と課題

生徒指導の役割は、時代とともに変わってきている。「させる」生徒指導から「支える」生徒指導への転換である。現行生徒指導提要もそれに合わせてしっかりとアップデートされている。様々な多様化された生徒指導事案に寄り添った内容になっているので、ニーズに応じて手に取っていくことが必要である。

そして、目の前の子どもたちの実態に応じて、その時々で、どの視点を取り上げるのかを吟味しながら、普段の授業の中にこそ生徒指導の実践上の4つの視点を採り入れていくことが必要である。

（溝延小学校 佐藤 正孝）

特別支援教育部会

I テーマ

すべての子どもへの 切れ目ない支援のあり方について

II 活動の内容

- 1 日時 令和7年7月31日(木) 9:00~10:50
- 2 場所 河北町立谷地中部小学校 食堂
- 3 内容 講話「すべての子どものすこやかな成長のために」
講師 山辺町立相模小学校
教頭 武田 豊己 氏

(1) 発達障がいの概要と対応

○知的障がい

- ・知的機能に制約、適応行動に制約を伴う、発達期に生じる障がい。
- ・個人内のアンバランスは本人にとって大きな足かせとなっている。
- ・早寝早起き朝ごはん等、生活習慣の遵守。お手伝いは就労に向けた第一歩。

○ADHD

- ・不注意型、多動・衝動型、混合型。不注意型は気づかれにくい。
- ・しつけの三原則、メディアは控えめ、ペアレントトレーニングを。
- ・確かな学級経営を大切にし、そのうえで個別対応を。信頼と尊敬を取り戻す取組みを大切に。
- ・生活習慣の確立ができると薬物療法も大切となる。(本人の利益のための薬物療法である)
- ・併存しやすい病気として反抗挑戦性障がい。反抗が癖に。薬物は効かない。

○ASD (自閉スペクトラム症)

- ・社会性・コミュニケーション・イマジネーションの質的な差異。
- ・発達の質(順番) 障害が押されている。難しいことが分かっていても、より易しいことが分からない可能性がある。できることにムラがある。
- ・生活力の向上がカギであり、学力より生活力を重視し、お手伝いなどを繰り返し、根気強く取り組んでいく。

(2) 障がいに共通した支援に必要なこと

○言葉をけずること、一目でわかる工夫をすること

○小さな努力をほめること

- ・動き出したらすかさずほめる。しようとした瞬間にほめることで、チャンスを逃さない。(動き出しても最後までできるか分からないため)

(3) すこやかな成長のために

○ペアレントトレーニング

- ・子に応じたほめ方を探ることが必要。できているときにこそ強化する。
- ・悪い行動を禁止しても、正しい行動（「ちゃんと」）が分からない。

○ソーシャルスキルトレーニング

- ・社会でうまくやるためのコツの練習。「生活の場での汎化」がカギとなる。

○メディアとの付き合い方

- ・ゲーム依存症、SNS依存症他。
- ・他の楽しみの保証、望ましい行動を増やしていくこと。

(4) 情緒障がい児の進学・就労について

○小中学校卒業後の進路について就労までも含め具体例で紹介いただいた

○特別支援学級在籍の子どもたちに意識づけたいこと

- ・将来、社会でみんなと一緒にいるために、今は分かれて一人ひとりに必要な力をつけている。いつまでも友達と別ではない。

(5) 愛着不全児の支援について

○最近メディアの影響から、間接的に愛着不全になっているケースが増加。

○ASDはパターン化を教える。愛着不全は愛情を教える。

(6) 感想より

- ・年々変化している発達障がいの概要、支援について、多くの実践や経験をもとに貴重なお話をいただき感謝している。特別支援学級の子どもにどのように関わり、支援するとよいか悩む瞬間があり、日々の実践の参考にしていきたい。
- ・ASDやADHDの子どもはこんな風に困っていたのか、難しさを感じていたのかと考えながら話を聴くことができた。それぞれの特性に合わせた指導を改めて考えていきたい。ほめる内容についても、児童の様子や表情・行動をよく観察し、自己有用感が高まるように行っていきたい。学びの多い研修だった。
- ・支援学級・支援学校の子どもの進学・就労について、よくわかっていないことがあったが、興味深く聞くことができた。

Ⅲ 成果と課題

○個別な支援を必要とする子どもの特性や見取り、支援のあり方について、豊富な経験から演習も取り入れながら講義いただき、有意義な時間となった。

○学校で、家庭で、親子で等、場面や役割に応じた支援について、演習を通して具体的に考えることができた。

○特別支援学級・学校卒業後の進路についての話も聞くことができ、将来的な就労をも見越した支援について考える良い時間となった。

▲通常学級で特別な支援を必要とする子どもも増えている。特別支援教育への理解を深めるとともに、諸機関との連携をさらに強化し支援のあり方を検討し続けたい。

(谷地中部小学校 飛塚 健史)

教育行財政部会

I テーマ 「信頼に応える学校事務をめざして」

II 活動の内容

1 第1回研究部会

(1)日時 7月31日(木) 9:00～11:30

(2)場所 河北町立谷地中部小学校 第二家庭科室

(3)内容

①講話：「地域学校協働本部事業と地域人材について」

講師：河北町教育委員会 地域コーディネーター 宮地 裕子 氏

ア. 地域学校協働本部主体事業

○学校支援活動

- ・地域コーディネーターによる学校、学校支援ボランティア間の連絡調整
- ・学校支援ボランティアによる活動の実施

(各学校継続および新規)

- ・地域学校協働本部会議開催

イ. その他の地域協働活動

○放課後子ども教室

- ・地域の協力のもと、子どもたちが安心して活動できる居場所を開設ダンス、けん玉、昔の遊び、アスレチック、アクセサリ作りなど
- ・放課後子ども総合プラン運営委員会開催

○家庭教育支援

- ・親子の体験的な活動や家庭教育に関する学習機会の提供に対する支援
- ・「幼児共有ふれあい広場」「やまがた子育て講座」の開催支援

○今後について

- ・学校支援者保証制度に加入し、万が一の事故やけがに備えている
小学校・中学校それぞれ加入しているが、統合時には加入のタイプを大人数のものにしたい。
- ・他の自治体の地域学校協働活動サポート人材バンクについての取組みを参考にできないか検討している。



- ・今年度から変更になった地域学校協働本部事業に係る消耗品の購入については、生涯学習課の地域コーディネーターと連携し配当内で要望し、現物支給となった。

②大型備品（管理備品、教育活動備品）現有数の確認

教育行財政部会では「大型備品現有数一覧表」を作成し、毎年新たに購入した備品等の現有数確認を行っている。大型備品は学校間で貸し借りができる体制となっており、学校教育活動に非常に役立っている。さらに必要とされる大型備品の要望については、校長会と連携しながら町に継続要望して各学校の教育環境整備に努めていきたい。

③事例研修、情報交換

退職後の給付金制度や給与・旅費について、また事務連携会議とも共催し、他市町の学校集金等についても資料を持ち寄り研修した。

Ⅲ 成果と課題

- 地域学校協働活動については、今後、小学校統合が近づく中で、地域とつながる場の設定や、学校が地域や家庭と一体となり子どもたちを育てていくことに継続して取り組むことができるよう、地域人材の把握や継続した支援の確保、そしてより一層コーディネーターとの連携が必要になることがわかった。
- 学校で児童生徒が安全に生活し、教育活動が円滑に行われるためには、財務管理を通して、学校経営に参画する事務職員の役割も大きくなっている。そこで本年度は、快適に学習できる環境を整備し、教育財産を適正かつ有効に活用できるよう研究を進め、信頼に応える学校事務を目指し、部員一人ひとりの資質と力量を高めることができた。
- 事務連携会議と共催し、一人一研究を行って発表した。事例研修や情報交換は、貴重な自己研鑽の場となっている。事例の共有や課題解決に向けての話合いを積極的に行ったことで、新しい視点の発見や見逃しがちな小さな疑問の解消につながった。
- ▲昨年度、「町学校予算の手引き」の更新を行ったが、消耗品の購入方法や補助金の交付規定など今年度も変更があった。変更があった時には、各校でその都度修正しておき、その後に部会で共通理解を図り更新していく必要がある。

(河北中 岩淵満里子)